2021 年度 森泰吉郎記念研究振興基金成果報告書

2022 年 2 月 28 日

研究課題名	高校での外国語学習経験と学習者の自己変容
研究代表者氏名	松木瑶子
所属・学年	政策・メディア研究科 博士課程 3 年

1. 研究概要

本研究は、高校時代に複言語学習を経験した者による学習経験の意味づけと、高校での複言語学習の意義を考察することを目的としている。青年期中期にあたる高校生は、自己を形成・確立していく時期にある。そのため、この時期に複数の言語学習の経験を得ることは、学習者の自己形成や自己確立、あるいは自身のルーツの振り返りに大きな影響を与え、その後の人生にも深くかかわってくる可能性がある。本研究では、日本の高校で英語以外の言語も学んだことのある高校生・大学生・社会人、ならびに高校の外国語教員を対象にアンケート調査やインタビュー調査などを行い、高校時代の複言語学習経験者が、その学習経験をいかに自身の生活や人生に結びつけようとしているのかを考察する。本研究が、日本で複言語教育を広く展開していくための一助になれば幸いである。

2. 今年度の活用内容および活動成果

＜資料調査・アンケート調査の実施＞

今年度は、昨年度に引き続き、**高校で英語以外の言語を学んでいる高校生、および学んだ経験のある大学生や社会人にアンケート調査を実施**して、高校時代の複言語学習の経験が、学習者の物事に対する見方や考え方にいかにかかわるのかを分析・検討した。調査は現在も継続中だが、現時点では、高校で英語以外の言語を学んだ者は、高校卒業後もその言語の学習を継続する傾向にあり、高校での複言語学習経験が、その後の留学や職業選択にも深くかかわっている可能性があることが見えてきた。また、大学生や社会人になるにつれて、高校時代に複数の言語を学んだことの意義や価値を学習経験者自身が自分なりに意味づけるようになっていることも浮かび上がった。アンケート調査は 2022 年度も引き続き行い、次年度にはアンケートの結果を踏まえたインタビュー調査も実施する予定である。

＜研究関連活動への参加と授業観察＞

まず、SFC では、修士課程在籍時から参加しているアカデミックプロジェクト「**外国語教育デザイン - Language Learning & Teaching Design**」（以下、AP プロジェクト）にて、活発な意見交換をすることができた。この AP プロジェクトは、大学院生による研究内容の発表や進捗状況の報告の場となっており、互いの研究を共有する機会となっている。本プロジェクトには、ヨーロッパやアジアの多言語・多文化社会に問題意識を持ち、教育工学や応用言語学などの観点からアプローチをしている院生のほか、外国語教育の中でも学習環境や学習教材などを専門とする教員が複数参加しているため、AP プロジェクトでの活動は本研究を進めるうえで重要な役割を担っている。

また、今年度は複言語教育を行っている首都圏の高等学校等を訪れて、**外国語の授業実践の様子を観察**したほか、**担当教師へのインタビュー**を行った。来年度は、調査対象校を全国のさまざまな高校に広げて、授業見学やインタビュー調査を一層進めていく予定である。

このほか、報告者は、慶應義塾大学外国語教育センターが文部科学省から受託している「**グローバル化に対応した外国語教育推進事業**」にも研究活動の一環として参加している。本事業では、新学習指導

要領が掲げる資質・能力の育成を目指し、パフォーマンス課題を取り入れた授業づくりについて議論を重ねている。今年度は会合が計 5 回開催され、報告者はそのすべてに参加した。また、2022 年 1 月に行われたワークショップにも参加した。

＜Thesis Proposal の実施＞
2021 年 11 月 19 日に Thesis Proposal を実施し、2021 年 12 月 1 日の政策・メディア研究科委員会にて合格が承認された。この合格をもって、博士候補となることができた。

＜学会への参加と論考の提出＞
今年度は関西フランス語教育研究会に提出した論考「高校でのフランス語学習経験と学習者の自己変容：学習者のライフステージに着目して」が採択されたほか、2021 年 8 月には、第 24 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムにて、「複言語・複文化能力の観点から見るフランスの中等教育課程における日本語教育のあり方：仏日の指導要領および授業実践者への意識調査から」をテーマに発表を行った（現在、発表報告書を執筆中）。さらに、日本外国語教育推進機構（JACTFL）に提出した論考「高校での複言語学習の経験と学習者による自己省察：高校生・大学生・社会人へのアンケート調査に基づく分析と考察」は 2022 年 3 月発行の学会誌に掲載予定である。このほか、今年度は慶應 SFC 学会にも論考を提出した（現在査読中）。

3. 今後の課題

まず、アンケートについては、2022 年 2 月までに十分な調査数を得られなかったため、次年度以降も引き続き調査を行っていく予定である。授業見学やインタビュー調査に関しては、今年度も新型コロナウイルスの影響で関係者以外の立ち入りを制限している学校が多くあったため、予定通りに実施することができなかった。こちらも、来年度以降、感染状況が落ち着いた段階で、首都圏のみならず北海道から沖縄県までの多様な学校で調査ができればと考えている。

調査終了後は、日本の中等教育課程における複言語教育の課題を整理・考察し、学習者が複言語能力を養っていくための指導枠組みを策定していく。そして、策定した指導枠組みを複数の学校現場で実践してもらい、浮かび上がった新たな課題を精査したうえで、中等教育課程における複言語教育の方策を提案する。

4. 今年度の研究関連業績と活動

- 松木瑶子「高校でのフランス語学習経験と学習者の自己変容：学習者のライフステージに着目して」『Rencontres』第 35 巻、110-114 頁、関西フランス語教育研究会、2021 年。
- 松木瑶子「複言語・複文化能力の観点から見るフランスの中等教育課程における日本語教育のあり方：仏日の指導要領および授業実践者への意識調査から」第 24 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2021 年 8 月 28 日、オンライン開催。
- 松木瑶子「高校での複言語学習の経験と学習者による自己省察：高校生・大学生・社会人へのアンケート調査に基づく分析と考察」『複言語・多言語教育研究』第 9 号、日本外国語教育（JACTFL）2022 年 3 月発行予定。
- 慶應義塾大学外国語教育センター受託、文部科学省「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」への参加（会合参加日：2020 年 5 月 5 日、6 月 27 日、7 月 29 日、8 月 22 日、9 月 19 日、ワークショップ：2021 年 1 月 23 日）、いずれもオンライン開催。
- 京都大学「教育評価の基礎講座」修了（2021 年 6 月～2021 年 11 月）。